みち

青木はるみ

黒いレインコートに黒のエナメルブーツ　白の花車な傘をかざし　装いは完璧だった　行きたくはなかった　私は雨を踏んで不退寺への道を右わきに外れ　昏い山肌がわずかに流れてくる方角にさかのぼっていった　カチドキの樹のしたに三人の少年がうずくまっている　クローバーの茂みがやわらかい穴を三つ凹ませて彼らの学生鞄が濡れている　美しい獣のように忠実に捨てられて　あたりは四つ葉のクローバーでいっぱいらしい　佛陀に向きあえば　ふるえてしまう私のたったいちまいの舌のそばに　彼らのなんまいもの舌がかさなりあうようにしてこともなげにそれは抜かれ蒐められていた

私は　なすすべもなくだらりと両の掌をさげ真正面を向いているひとりの少女であることがわかっている　少女に関するあらゆるディテールを　あまりにも間近く凝視

したために私の身体は　とほうもなく巨大になって　う
っそうたるカチドキの枝葉の細片が私の髄髄にまで侵入
してくるのだ　カチドキ?何のための凱歌か　肩にかか
る捲毛の　いっせいに枯れてしまう軽みでおもわず心も
とない足もとを見おろせば　私が踏みぬいた数知れぬ薄
氷めくものが傷ぐちのように固まりあおうとしている
おお　私はここでどっと老いていく少女を見ているのだ
あの三人の少年のうちのひとりを愛し　あのくちびるに
おずおずと触れた私のゆびは無惨に節くれだち　私のく
るしみは霜のようにぼうぼうと消えていくしかない

いちまいの絵のように舌のように世界を丸めてのぞいて
みても　伝説の水煙のなかで青銅に化した女たちの裸の
あしは　ありもしない空を蹴りつづけるだろう　いつま
でも女は　まっ逆さまの受容なのだから

私だって　もう墓地までも行ってきた　とうに遅刻して
いた